

幼児のあいさつ表現（1）

—乳幼児の「あいさつ表現」が生まれるまで—

柔原 昭徳

Greeting of Preschool Children (1)

— Greeting Development of 1 year children —

Akinori KUWAHARA

1. はじめに—「あいさつ」という言葉について

「あいさつ（挨拶）」という言葉は、つぎのような意味をもっている。

第1に、仏教用語としての挨拶とは、「禪家で、師僧が門下の僧と問答して、その悟道・知見の深淺を試みる」とある。挨拶という言葉は、「〈一挨拶〉」というように、中世の禪僧によって応答、問答するという意味で使用された語がしだいに一般化したもの（注1）であり、もともとの意味は、人間が同じ空間において相互に対面しあい、ひとつテーマをめぐる問答しあうことなのである。

第2に、「挨」とは「推（おす）」の意味であり、「拶」とは「逼（せまる）」の意味である。つまり、挨拶のもともとの意味は「推し、逼る（迫る）」なのであり、「推シアヒ、ヘシアフナリ」（『新編大言海』）との意味である。

第3に、それから転じて、私たちが使っている「うけこたえ、応対、返事」などの意味が派生する。日常生活のなかで用いている「相手ととりかわす、祝意や感謝・親愛の意などを述べる言葉。また、それに伴う動作」（『広辞苑』）という意味もでてくる。日常的には、さらに「えしゃく。おじぎ。受け答え。応対。答礼。返礼。報酬」などの意味に用いられる。

2. あいさつ言葉の実態—アンケート調査から

幼稚園・保育園・小学校などにおける教師と子どもたちとの生活のなかでは、さまざまな場面において、さまざまな形の「あいさつ」が行われている。

教師と子どもたちは日々の生活のなかで、たがいに「あいさつ」を交わしている。それと同時に、教師は「あいさつ」を指導の対象として位置づけてもいるのである。

しかし、「あいさつ」についての活動は施設や学校だけに限定されているわけではない。子どもたちが施設や学校に来るまえの家庭でも、「あいさつ」はされつづけてきた。さらに、施設や学校を卒業し

たあとの社会生活においても、「あいさつ」はされつづけることになる。この「あいさつ」という活動は、人間が生涯にわたって使用しつづけることがらなのである。

人間が生涯にわたって使用しつづける「あいさつ」であるが、誰が、いつ、誰に対して、どんなあいさつ言葉を使い、どんな動作や表情とともにあいさつをしたのかというように、あいさつ活動全体をとらえることは簡単にはできない。そこで「あいさつ言葉」だけに限定して、大人（学生）と乳幼児のあいさつの実態をみる。

大人（学生）のあいさつ言葉の実態については、1990年6月5日、山口大学教育学部2年の「幼児教育概説」受講生43名の協力をえて、「あいさつ」についての簡単なアンケートを実施した。「あいさつ言葉」については、設問のひとつに「1. 日々の生活のなかの「あいさつ」の言葉を、思いつくものから5つほど、書き出してください」とかかげ、日ごろの生活の中で用いているあいさつ言葉の実態を明らかにしようとした。

集計の結果は次のとおりである。

順	あいさつ言葉	回答数
1	おはよう(27) おはようございます(16)	43
2	こんにちわ (は)	36
3	こんばんわ (は)	17
3	おやすみなさい(12) おやすみ(5)	17
5	さようなら	15
6	いただきます	12
7	ごちそうさま(7) ごちそうさまでした(4)	11
8	ありがとう(7) ありがとうございます(1) ありがとうございました (1) (ありがとうございました、クラブなどで) (1)	10
8	ばいばい・バイバイ(9) またね、バイバイ(1)	10
10	失礼します	9
11	おつかれさまでした	6
12	すみません	3
12	行ってきます	3
12	ただいま	3

回答数の多い順に並べたものが左の表である。

回答者の総数は43名であるから項目の総数は215になるはずであるが、そのうち、3項目だけの記入者が2名いたので、総合計は211項目となった。

ただし、回答数が1項目だけのものは「そのほか」のなかに入れた。

第1位の「おはよう」から、順次「こんにちわ」「こんばんわ」「おやすみ」「さようなら」の5位までの合計が128項目、全体の60.7%を占める。

さらに6位の「いただきます」から、順次「ごちそうさま」「ありがとう」「バイバイ」「失礼します」の10位までの合計が52項目、全体の24.7%を占める。

だから1位から10位までの合計は180項目となり、じつに85.3%となる。当然のことであるが、それは「あいさつ言葉」が、社会のなかで共通していること、あるていどのパターンで限定されていることを示している。

12	いらっしやいませ(2) いらっしやい(1)	3
16	ごめんなさい	2
16	元気ですか(1) 元気?(1)	2
	そのほか	9
	合 計	211

学生の回答した大人のあいさつ言葉のうち、項目によっては、0歳児クラスにおいても「あいさつ表現」が可能であることを、観察記録の記述からもうかがい知ることができる。

たとえば、大人の「ありがとう」という言葉に対応する動作としては、保母の「あっ、あっ（ありがとうの意）」の言葉と、「頭を下げる」動作に対して、0歳10か月の乳児が「頭を下げておじぎをした」と記録されている。

また、大人の「いただきます」に対応する表現としては、0歳児の食事の前の「おててを合わせて」の歌をめぐる、それぞれの子どもが次にあげるように多様な「あいさつ表現」をしている。

「Yu児1歳1か月—手をたたきながら、体をゆらし、声を出す。

Ma児1歳1か月—Yu児ほど手はたたかない。手を合わせて「あっ」と言う。

St児0歳11か月—歌に合わせて体をゆらす。

Sk児0歳6か月—歌に合わせて「ウーウー」と声を出す。

Yo児0歳6か月—歌に合わせて（？）手足をばたばたさせる。」（注2）

さらに、0歳児の子どもの「バイバイ」とは、母親に抱かれて登園したあと、その母親に対して行う「さよなら」の意味をこめた動作であり、言葉である。この「バイバイ」ばかりは、学生のつかう動作や言葉とまったく同じ機能を果たしている。

以上のように、あいさつ言葉だけに限ってみれば、上位10位までのうち、大半が0歳児のあいだに、すでにその「芽ばえ」というべき姿があらわれていたり、そのままの形で用いられていたりするのである。

これが、5歳児クラスになれば、ほぼ大人のあいさつ言葉と同じていどのものになる。

3・4・5歳児クラスの子どもが使用しているあいさつ言葉の実態については、大内保育園によるアンケートから考察する。1990年11月1日付で実施された「『あいさつ』について」と題するアンケートの設問3は「ほかにどんなあいさつができますか」である。

設問1で「おはよう」のあいさつの実態をたずね、設問2で「ありがとう、ごめんなさい、かしてね、どうぞ」の4つを例示して質問しているので、その4つ以外の乳幼児のあいさつ言葉と、大人のものと同なる言葉に*印をつけておく。

それぞれの年令の子どもの、そのほかの「あいさつの言葉」は次のとおりである。

組	3歳児クラス (16名)	4歳児クラス (11名)	5歳児クラス (27名)
	*おやすみ 6	*おやすみ 5	*さようなら 17
	*さようなら (バイバイ) 6	*さようなら 5	*こんにちわ 16
	*ただいま 5	*いってらっしゃい 4	*いただきます 8
	*こんにちわ 4	*こんにちわ 3	*おやすみ 7
	*いただきます 3	おかえりなさい 3	*ごちそうさま 6
	*ごちそうさま 3	*ただいま 2	*いってきます 6
	いってらっしゃい 3	*いってきます 2	*ただいま 6
	*いってきます 3	じゃあまたね 2	おじゃまします 6
	おじゃまします 2	おじゃまします 2	おかえり 4
	おじゃましました 2	おじゃましました 2	ごめんください 4
	そのほか 7	そのほか 4	いってらっしゃい 3
			*こんばんわ 2
			どういたしまして 2
			そのほか 12

すでに設問1で「おはよう」のあいさつの実態をたずね、設問2で「ありがとう、ごめんなさい、かしてね、どうぞ」4つを例示しているの、それら5つの言葉は上記の事例としては記入されることはない。そこで、「おはよう、ありがとう、ごめんなさい、かして、どうぞ」の5つのあいさつ言葉の重なりぐあいも検討してみると、「*おはよう、*ありがとう、*ごめんなさい」の3つが重なることになる。

学生の複数以上の回答を得ている17の「あいさつ言葉」のうち、なんと12までが3・4・5歳児のもの重なっているのである。

以上のことから、大内保育園での幼児のあいさつ言葉は、3分の2でいどは大人(学生)と同じ言葉を使っていることが判明する。

3. 研究の経緯

幼児保育の現場での共同研究テーマ「幼児のあいさつ表現の実態と指導」をスタートさせるにあたって、私たちは「あいさつ」という人間活動が現代社会においてもっている教育的意義と、乳幼児保育の実践上の意義を考察することから着手した。

だからといって、高邁で抽象的な論議から出発しようとしたのではない。そうではなくて、目の前の乳幼児の実態から出発して、できれば次の3点の実践レベルの切実な願いを堅持しつづけようとした。それは、

- ・あいさつ表現についての基本的な知識や認識を獲得する、
 - ・乳幼児の日常のあいさつ表現の事実や、あいさつの見方や考え方を知る、
 - ・具体的な保育場面でのあいさつの指導の仕方も身に付ける、
- ということであった。

そのような実践的な願いを出しあいながら集約したのが次の文章であり、研究を進めていくうえで
の基本的指針となった。

現代社会において私たち人間は、網の目のように複雑に入りくんだ多様な人間関係のなかで生きています。日ごろ、その網の結び目において、物理的には多くの人と出会いながらも、心からの出会いをしていないのではないのでしょうか。たとえば、朝、路上で出会っても、心から「おはよう」という言葉がけすらできないことが増えてきているのではないのでしょうか。

日常生活のなかでのちょっとしたあいさつや言葉がけが、人間と人間の心の結びつけ、おたがいの和をひろげ、さらにはコミュニティづくりへとひろがっていきます。なにげない日常生活のなかでの挨拶や言葉がけが、人間と人間のかかわりをつくる土台となり、出発点となると思われます。

いま、わたしたちの園の子どもたちは、じっさいに人と出会ったときに、どんなあいさつを交わしているのでしょうか。元気よく、気持ちのよくなるようなあいさつや言葉がけをしているのでしょうか。

「おはよう」とこえをかけても、「おはよう」という声のでにくい子どももいます。微笑みとともに元気な声が返ってくる子どももいます。また、バスの運転手さんにむかって「へんなおじさん」という子もいますし、「運転が上手ね」と言葉がけた子どももいるのです。もちろん園には、「おはよう」という言葉を、まだ獲得していない乳児もいます。しかし、乳児は乳児なりに人との出会いのときに「あいさつ表現」とみなしてよいようなまなざしや表現や動作をしているのではないのでしょうか。

わたしたちは子どもたちのあいさつの実態を把握することから出発して、まずは、わたしたち自身が清々しいあいさつや、思いやりのある言葉がけのできる保育者になりたいと思います。

そして、子どもたちには、

- ・あいさつすることを気持ちのよいことだと感じたり、
- ・おたがいを認めあったり、
- ・相手の気持ちを考え、思いやりのある子どもに育ててほしい、と願うのです。

わたしたちの園では「あいさつ表現の実態と指導」という具体的なテーマをかかげることにより、まず保育者としての私たちのあいさつや言葉がけが、たんなる儀礼的なあいさつにとどまらないで、子どもたちを認め、親愛や思いやりの気持ちを伝え、豊かな人間関係のきづいていくための出発点として位置づけたいと思います。

さらに「あいさつ表現」を、言語表現・身体表現・感情表現などをふくめた総合的な表現活動としてとらえ、日ごろの保育活動の重要な指導の内容とも考えたいのです。

以上のような基本的な構えで共同研究に着手した。

そして、手はじめに目の前の子どもたちの「あいさつ表現」の実態を調査し、記録することにしたのである。

4月下旬の予備的な打ち合わせのあと、6月1日に第1回の園内研究会を開催し、実質的な共同研究をスタートさせたのであった。

その研究会では、0歳児から5歳児のクラスの子どもたちが実際に「どんなあいさつを交わしているか」を、クラス担任が書きだしてみることにした。

また、研究を進めるにあたって「あいさつ表現」については、つぎのような段階があるとも予想した。

- 1) あいさつという言葉や事柄があることすら知らない段階、
- 2) あいさつの言葉や事柄は知っているが、できない段階、
- 3) 儀礼的にあいさつ表現をする段階、
- 4) 心からあいさつ表現ができる段階、の4段階である。

0歳児の乳幼児は、たとえ「バイバイ」や「はよー（おはよう）」などのあいさつ言葉を出していたとしても、けして出会った相手に対して「あいさつをしよう」と考えてしているわけではない。しかし、あの生後3か月たらずで入園してくる乳児が「あいさつの表現」ともいべき音声や動作や表情を、どんなプロセスをへて体得していくのか。いわば、「あいさつ表現」にいたるまでの言葉や動作や表情の発達過程を明らかにしてみたいと考えたのである。

さらに、あいさつ活動の研究は、日ごろ観察しやすい「あいさつ」という窓口から、乳幼児の言葉の発達や身体表現や感情表現などの発達を、研究同人の全員で研究することを意味する。つまり、乳幼児の総合的な発達のようなすを日常の保育を通して研究してみたいという遠大な目標も意識していたのである。

「あいさつ表現」の意義を実際の保育のなかで考えあい、心からの「あいさつ表現」を育てるための指導の在り方を考え、保育者みずからが実際の保育のなかで生かしていく。さらに、できれば地域社会にいきる保育園として、保護者や地域社会でも明朗で快活な「あいさつ」の輪が広がればとの願いも持ったのであった。

したがって、研究の方法としては、

- (1) 0歳児から5歳児までの各クラスにおけるあいさつの実態を記録する、
- (2) 記録をもとにあいさつの保育的意義について話し合う、
- (3) 保育研究をとおして指導のあり方を検討する、

の3つが中心となった。

また、年間計画を立案して、あいさつ活動をふくむ研究保育も試みた。

4. 保育園児の「あいさつ表現」の観察から

1990年6月1日の研究会は、4月末から5月にかけての予備的な打ち合わせをへて、「あいさつ表現

の研究」を本格的にスタートさせる第1回目の会合ともなった。

そのときに提出された資料のひとつに、「あいさつ」と題したB5版、全5ページばかりの記録がある。乳幼児「あいさつ表現」を研究の対象として位置づけるにあたって、とにかく園児たちの実態を書き出してみようという趣旨で、0歳児から5歳児にいたるまでの各クラスの子どもの「あいさつ」の実態を記録したものである。

0歳児クラス「ひなぎく組」の記録は、布谷仁美先生のつぎのような記述ではじまる。

S児が玄関でスリッパを出して遊んでいるとき、スリッパを口の中に入れようとしたので、保育者は「ばっちいから、ちょうだい」といって手を出す。するとS児はスリッパを渡してくれる。保育者が「あっ、あっ（ありがとうの意）」といって頭をさげると、S児も頭をさげておじぎをした。(1990. 5. 17. 午前中)

S児は、当時0歳10か月の女兒である。

上記の観察記録にもあるように、保育者の「あっ、あっ（ありがとう）」というお礼の言葉にたいして、それに呼応するようにS児は頭をさげて「おじぎ」の動作をしている。ここで言う「おじぎ」とは、漢字であらわせば「御辞儀」のことであり、「頭をさげて礼をすること。あいさつ」にほかならない。この保育者の言動とS児の動作は、両者のあいだに交わされた「あいさつ表現」とみなすことができるのである。

上記の記録にあらわれた「あいさつ表現」にかかわる一連の活動を、両者のあいだのコミュニケーションのあり方から分析してみると、次のようになる。コミュニケーションとは、一般に「伝達」の意味に用いられるが、ここでは、なんらかの「ものごと」の「やりとり」関係、ないしは「共有」の意味に用いる。

① 観察記録の冒頭で、保育者は「S児が玄関でスリッパを出して遊んでいるとき」と記録している。この保育園の玄関と、0歳児の保育室とのあいだには事務室がある。S児は、葡萄ないしは独立歩行によって、保育室から玄関まで出かけ、そこでスリッパをもてあそんでいたのであろう。

そのS児の様子を記録することができたということは、たとえS児が保育室から1部屋分ほど離れた玄関で遊んでいても、きちんと保育者の「まなざしの範囲」に入れているということの証拠でもある。S児の状態を保育者は遠くから距離をおいて見守っている。

その様子を保育者とS児のあいだの「物事のやりとり関係」からみれば、保育者がS児に「目を遣っている（＝見遣る）」状態である。また、視線を投げかけ、「まなざし」で働きかけている状態であるといってもよい。このときS児の目や意識はスリッパだけに集中していて、保育者の「まなざし」を感じとることはない。

② この場面でのS児にとって、スリッパは本来の「履くもの」ではなくて、遊び道具となっている。しかし、そのスリッパはかならずしも「良い遊具」ではない。

保育者は、楽しそうに遊んでいるなど思いながらも、口にもつていかなければよいかと心配をする。心配とは「心くばり」のことである。また、保育者は気を使い、気を配り、思いやっ

るといってもよい。

これを保育者とS児のあいだ「やりとり関係」からみれば、文字どおり「思いをやっている(遣っている)」、つまり、「思い遣る」状態なのである。

しかし、その保育者の思いやりは保育者の一方的な目配り・心配りであって、S児がその「思いやり」を「うけとる」ことはない。まだ、「やりとり」は成立していない。

- ③ そのスリッパは、S児が「口の中に入れようとした」とたんに、衛生上よくないものになってしまう。そこで保育者は「ばっちいから、ちょうだい」という言葉を投げかける。S児のおかれた場面状況から考えると、「汚いから、(そのスリッパを)ちょうだい」の意味である。言葉が音声としてS児に届けられるのである。
- ④ S児は保育者の言葉に反応する。今度はS児が保育者のほうを見ることになる。S児の視線が投げかえされたのである。これまで「保育者からS児へ」と一方的であった働きかけが、これを契機にして相互的な関係へとかわるのである。
- ⑤ そのころには、保育者はS児の身近に移動して、S児の前で「手を出す」という動作によって働きかける。それは同時に「ちょうだい」を意味するサインでもある。
- ⑥ そのとき、「ちょうだい」という言葉を手の動作以外に、顔の表現も、その場にふさわしいものになっていたはずである。
- ⑦ S児は、手にもっていたスリッパを保育者にわたす。
- ⑧ 保育者は「あっ、あっ」という音声と、頭をさげる動作でS児に働きかける。
- ⑨ 保育者の行動に誘われるようS児も頭をさげる。

それは保育者の「ありがとう」に対する「どういたしまして」でもないし、「ありがとう」そのものでもない。たんなる保育者の模倣と考えるとよいであろう。頭をさげるという「あいさつ的」な動作は表現されるが、「あっ、あっ」などの言葉はまだ出ていない。

このあとも保育者とS児の「やりとり」はつづくであろうが、この観察記録がもともと「あいさつ表現」の記録を目的としたものなので、いわゆる「あいさつ」がとりかわされた時点で記録は終わっている。

以上の保育者とS児の「やりとり」をまとめてみる。

「やりとり」とは、文字どおり「遣り取り」のことであり、コミュニケーションである。それは「もの」にかぎらず、「こと」も「やりとり」の対象となる。保育者とS児のあいだで「やりとり」された「ものごと」を以下に抽出する。矢印(→)が「やりとり」の方向を示し、()のなかの記述「やりとり」された「ものごと」を示す。

- | | | | | | |
|---|-----|---|---------------|---|----|
| ① | 保育者 | → | (視線・まなざし) | → | S児 |
| ② | 保育者 | → | (心くばり・気くばり) | → | S児 |
| ③ | 保育者 | → | (「ちょうだい」・言葉) | → | S児 |
| ④ | 保育者 | ← | (見る・視線) | ← | S児 |
| ⑤ | 保育者 | → | (手を出す・動作) | → | S児 |
| ⑥ | 保育者 | → | (ちょうだい・言葉と表情) | → | S児 |

- ⑦ 保育者 ← (スリッパ・もの) ← S児
- ⑧ 保育者 → («あつ、あつ」・言葉) → S児
- ⑨ 保育者 ← (頭をさげる・動作) ← S児

たとえば①の「保育者→(視線・まなざし)→S児」は、保育者からS児にむけて「視線・まなざし」が投げかけられていることを意味する。当然のことながら①の段階では、S児の応答はない。保育者から一方的に投げかけられていて、子どもが気づくことはない。「やりとり」のうち、保育者の一方的な「遣る」活動があるだけで、S児の「取る」活動はない。視線やまなざしは、まだ共有されていないのである。

以上の①から⑨までの「やりとり」のうち、一般に「あいさつ」と呼ばれる活動は、⑧「保育者からS児に向けて発せられた「あつ、あつ(ありがとう)」の言葉」と、⑨「その応答行為としてS児の頭をさげる動作」の2項目である。

日常生活のなかで一般的に用いられている「あいさつ」とは、人間と人間のあいだで交わされる感謝や祝意の言葉や動作である。しかし、「あいさつ」は、それからの言葉や動作だけが独立して行われることはない。かならず「あいさつ」をとりかわすまでの一連のさまざまな行為があり、その結果として「あいさつ」がなされるのである。

あいさつ表現の直接的な契機となった具体的な「もの」としてはスリッパであるが、その前後には「あいさつ表現」に独自の活動が附随している。それらの「やりとり」のひとつひとつは、「あいさつ表現」を構成する要素でもある。

5. 乳幼児の「あいさつ表現」の要素

乳幼児の「あいさつ表現」が本来「あいさつ」として成立し、機能するためには、つぎにあげる要素が不可欠となる。

① 同一の場において、出会うこと

大人のばあい、電話での挨拶のように、同じ空間にいなくても、同じ時間にあい合わせればあいさつは可能である。また、手紙のように、同じ時間と空間にいなくても、挨拶は可能である。

しかし乳幼児のばあい、同じ場にあいわせて出会うことから「あいさつ表現」がはじまる。子どもと大人、あるいは子どもと子どもとが、実際に「見る・見つめる(凝視する)・認める(わかる・判別できる)」などを契機として、あいさつ表現へと結び付くのである。ひとりの子どもが、相手に対して面とむかって「まなざし」を投げかけるとき、つまり、相手を対象化して「対面」するときのみ、乳幼児のあいさつ表現は可能となるのである。

② 言葉かけ(言葉のやりとり)

多くのあいさつ表現は、言葉をとまなう。「おはよう」「いただきます」「さようなら」などの定型の言葉(決まり文句)である。その言葉は、相手や場におうじて使い分けられることになる。

しかし、だからといって、0歳児の子どもに「あいさつ表現」ができないというわけではない。たとえば、「アー」「オー」などの喃語は、生後3、4か月の大人の「口の開閉」に対する乳幼児の「共

鳴動作(コアクション)」を契機として引き起こされ、強化されるのではないかとさえいわれている。

(注3) この「口の開閉」の「やりとり」こそ、あいさつ表現の原形であると考えられる。

③ 身ぶり・手ぶりなどの身体表現(動作)

ことに乳幼児のあいさつ表現には、手を前に出す、手を上げる、手を振るなどの手ぶりや、身体を前に出す、頭を下げるなどの身ぶりをともなう。多くの子どもが、言葉よりも先に、身ぶりや手ぶりなどの身体表現ができるようになる。

とくに遠くから働きかけるとき、言葉がうまく使えない時期には、乳幼児の相手をする大人の側も、この身ぶり・手ぶりを多用することになる。

④ 顔の表情

あいさつには、言葉や動作だけではなくて、同時にそのときの気持ちも伝えることになる。目を見開く、眉を上にあげて微笑みかける、優しい目で笑う、口を丸く大きく開くなどは、「口以上にものを言う」あいさつ表現の大事な道具となる。

ここでは、いちおう以上の4点を、乳幼児のあいさつ表現の構成要素としておきたい。

乳幼児のあいさつ表現の構成要素は、そのまま保育活動を展開するうえでの「あいさつ表現」の意義とむすびつく。

第1に、「見る・見つめる・追視する・目で訴える」などの「まなざしの共有」をもふくむ「あいさつ表現」は乳幼児の人間関係の出発点である。人間どうしの相互的なコミュニケーション活動のひとつであり、人との出会いの出発点である。まさに「人間(じんかん)的存在」として発達していくための出発点があいさつ表現なのである。

大人が子どもと出会ったとき、その子どもに対して最初に投げかけられる言葉は何であろうか。村田孝次氏によれば、

「それはおそらく、子どもの顔をのぞき込んで発声される「ばあ」か、あるいは子どもの名前であろう。いずれにしてもそれは、広い意味でのあいさつである。」

と述べ、さらにつづけて、

「一方、人のことばの進化の歴史の第一ページでは、あいさつことば的なものだけがあったと思われる。これはことばの出発点として欠かすことができないものである。ことばの系統発生を想像的に遡ってみると、人が人として独自の社会生活を営むようになったばかりのころのことばは、対人関係のための潤滑油のような役割を果すだけのものであったと考えられる。つまり、今日のあいさつことばのようなものであったと考えられる。」(注4)

と言う。

村田氏も言うように、あいさつ表現は、いわば「出会いの言葉」であり、しかも、人間であればどれも生涯にわたって使いつづける言葉なのである。これも固体発生的にも、系統発生的にも、そうなのではないかというのである。だからこそ、0歳児から5歳児までの子どもがいる保育園での研究テーマとしては適しており、日常の保育活動のなかで研究を進めることができ、その成果が再び日常の保育実践のなかに生さるテーマでもある。

第2に、「あいさつ」は、乳幼児のさまざまな活動の出発点でもある。つまり、園や家庭でのさまざま

まな生活の区切りであり、その結果として、次の活動への構えをつくられる。

第3に、「あいさつ表現」は身体表現（動作・身ぶり・手ぶり）であり、同時に、言葉や感情の表現などをふくむ総合的な表現活動である。だからこそ、人間の初期の発達をうながす仕事を担当する保育者にとって、「あいさつ表現」への着目は、乳幼児の全面的発達を保証するための総合的で、全面的なものを見方を育てることになる。

以上のような、あいさつ表現にかんする仮説から出発して、日常の保育活動のなかの「あいさつ表現の実態」をさぐり、「あいさつ活動」の指導について研究をすすめることにした。

保育現場で実際の保育活動をすすめる立場からみて、「あいさつ表現の実態と指導」という研究テーマは、つぎのように積極的な意味があると予想する。

a) まず、「あいさつに関する活動」は、園の内外ではもちろんのこと、乳幼児の日常生活のなかのどこにも見られる、ありふれた活動である。だから、「あいさつ」への見方や指導のありかたを研究することは、日常の保育活動そのものを見直したり、改善することにつながる。あいさつは0歳児でも5歳児でも発達におうじた表現形態が観察できる。つまり、日常的な活動である「あいさつ」を中心に乳幼児の発達のすじみちを研究することになる。いやそれどころか、人間の一生にわたって行う活動であるので、社会的な自立を見とおした広がりのある研究となる。

b) 「あいさつ活動」をたんなる儀礼的な言葉のやりとりとして見るのではなく、言語や身体や感情など、子どもの総合的な表現活動、ないしは人間関係の出発点としてみることによって、「あいさつ表現」を豊かな保育活動のひとつとして位置づけることができる。

c) 乳幼児の「あいさつ活動」は保育者自身のあいさつ表現なしに成立しない。日常の保育活動における保育者の「あいさつ表現」そのものを見直し、改善することにつながらざるをえない。そのことは、保育者の実践的の力量を身につけることにほかならない。

6. 0歳児クラスにみる「あいさつ表現」の発達

0歳児クラスは乳児6人である。そのうち、4月はじめの時点で、すでに入園していたのはyu児ひとりだけであり、ほかの5名は4月から通園をはじめた。

ここでは、0歳児クラスのあいさつ表現の記録をもとにして、子どもたちが「バイバイ」と「はよー（おはよう）」というあいさつ言葉が可能となるまでの発達のすじみちえを考察する。

0歳児であっても、たんに「おはよう表現」だけではなく、そのほかにおやつや食事のときの「いただきます」の場面でのあいさつ表現もできる。

ここでは朝の登園時における「あいさつ表現」に限定して考察することになるが、その場面でのあいさつ表現とは、保母との朝の出会いと、それにひきつづく保護者との別れが中心となる。はじめ保母との出会いそのものが分からなかった乳児が、1年半前後から「バイバイ」と「はよー」などの言葉を使い始める。その言葉が表現されるまでの過程をあきらかにしたいのである。そこで私たちは、この朝の登園の場面でのあいさつ表現を「おはよう表現」という名称を与えて、その場面に注目しながら記録することにつとめた。(注5)

1) 保育者との出会いや母親との別れの意味が分からない

母親との朝の別れは、何のことかわからない。(Da児0歳3か月、Sk児0歳5か月)

4月に入園した子どもにとって、保育所は新しい環境であり、そこで出会う保母は見知らぬ人のひとりである。しかし、3か月ないしは5か月の乳児にとって、あさの登園時での保母との出会いや、それにひきつづく母親との別れの意味そのものが分からないらしく、母親の手から保母の手にわたされる時、子どもの動作や表情にあまり変化がみられない。

2) 泣く

新しい環境になじめず、泣くことが多い。(Yo児0歳5か月)

いわゆる「人みしり」をしいはじめた段階である。

朝の登園のとき、多くの乳児たちが母親に抱かれてやってくる。上記1)の段階のように、3か月未満の乳児の場合、母親以外の人の区別ができなかったり、気付いていてもそれを表現する手立てをもっていない。Sk児のように、0歳5か月児であっても意味が分からない場合もある。しかし、0歳5か月のYo児のように入園当初から泣いていた子どももいる。

また、入園当初のうち別れること自体が分からなかった子どものなかにも、「泣くこと」をはじめ子ども出てくる。そして今度は、母親と別れて保母に抱かれることが簡単にはできなくなる。入園当初の乳児にとって、母親と別れること自体がひとつの大きな仕事となる。

「人みしり」とは、子どもが見なれぬ人を見て泣いたり、恐れったり、はにかんだり、嫌う行動をすることである。この「人みしり」とは、子どもに母親・保母・そのほかの大人などの「人を見知る能力」が身に付いたことの証拠である。乳幼児の対人上の知識や感情の発達の一段階であって、けして否定的に見てはならないのである。

「人みしりの不安は、見知らぬ人物に親しいものを期待し、しかも相手がそうでないという現実がわかった時に起こる見知らぬ人を見知る不安である。(中略)このような不安が経験されるには、相手が自分の期待した親しい者、あるいは母親ではないという現実認識の能力(見知る能力)がある程度発達していなければならない。」(注6)

はじめのうち、0歳児の子どもはもちろんのこと、はじめて入所する1～3歳児であっても、朝の別れのときには多くの子どもが「泣く」というかたちで気持ちを表現する。「泣くこと」は、自分の状態が不快であることを知らせる乳幼児の表現の仕方のひとつなのである。

また、子どもによっては、「保育者が「○○ちゃん、おはよう」と話しかけても無表情な場合もある。」(Sk児0歳8か月)

だから、保母としては、できるだけ気持ちよくスムーズに母親の手から受け取りたいと願いながらも、結果として「泣いている子どもを「おはよう」と言って母親から抱っこでうけとる」(0歳10か月)

ことになることが多い。

3) 保護者にしがみつく

登園時、保育者に会うと、父親にしがみつく。	(Sa児1歳0か月)
母親にしがみつく。	(Sa児1歳3か月)

新生児は、移動する能力や運動能力はほとんど持ちあわせていないといってよい。しかし、つぎのような反射運動をすることが知られている。

- ・手に触れた物をつかむ。
- ・だっこされると、抱かれやすいように姿勢を変える。
- ・急に姿勢をかえられたりすると、抱きつく。(注7)

これらの運動は、乳児とまわりの人との間のコミュニケーションのために、じっさいに役だっている。たとえば「手に触れた物をつかむ」についてみれば、乳児の開いていた手のひらに大人がガラガラを握らせる。なにかの拍子に乳児が手を上げてガラガラの音がする。周囲の大人は、それが乳児から発信された合図のように受けとる。両者による「ガラガラ」の共有である。それを契機に、さらに乳児の手を振る回数が増えることもある。

あいさつ表現との関連でいえば、登園してきた乳児が、いつもの保育者とはちがう保母に出会うと、抱かれていた保護者の衣服をつかんだり、保護者に抱きついたりする。上記の観察記録の言葉にしたがえば、「しがみつく」といった行動である。これは、保護者から離れたくないことの身体表現であり、同時に保母の方へいきたくないことの身体表現でもある。

4) 泣きやむ

父親とわかれたとき「アーン」と泣くが、父親が園庭に出ると、すぐに泣きやむ。	(St児1歳0か月)
母親との別れも泣かなくなった。	(St児1歳0か月)
抱っこしてもらうときに泣くが、すぐに泣きやむ。	(St児1歳3か月)

「泣くこと」は、自分の状態が不快であることを知らせる乳幼児の音声表現のひとつであった。母親や父親との別れのあとも、いつまでも泣いていた子どもにも変化がおこってくる。保育者の手にわたされると泣いていた子どもが、「すぐに泣きやむ」ようになったり、保護者の姿が見えるうちは泣いているけれども、「父親が園庭に出たり」、視界の外へ出てしまうと、すぐに泣きやむ。

そして、目の前の保育者の世界や、保育室の世界のなかで安定して遊びをはじめるのである。

5) 母親を追視し、あとを追おうとする

母親とわかれるとき、泣きそうな顔でジーと見たり、後を追おうとしたりする。

(Sa児0歳10か月)

保育者が母親に「行ってらっしゃい」というと、本人は母親の方を「じー」と見ていた。

(Ma児1歳2か月)

母親と保母の違いがわかり、母親から保母の手にわたされることをいやがる。そして、離れていく母親を追おうとする。はじめ泣き叫んだり嫌がったりのように声や身体で直接的に追うことから、次に別れていく母親の姿を間接的に目で追うことができはじめる。

6) 泣かずに保育者に抱かれる

保育者が抱っこして「○○ちゃん、おはよう」と声をかけると、ニヤッと笑い、しがみつく

(Yo児1歳0か月)

このばあいの「しがみつく」は、「3) 保護者にしがみつく」とは違う。

登園時、その日はじめて保母に出会ったときにする「しがみつく」は、母親や父親から離れたくないとの動作とみるべきであろう。しかしこの場合の「しがみつく」は、いったん保母に抱かれたあとで、保母の「○○ちゃん、おはよう」という言葉かけにたいする応答動作としての「しがみつく」であって、これは保母のおはよう表現に対する応答の芽ばえと考えられる。

7) 保育者の「おはよう」の声かけに対して笑う

保育者が、顔を見て「おはよう」というと、ニヤッと笑う。 (Da児0歳5か月)

保育者が、顔をのぞきこみながら「○○ちゃん、おはよう」と言うと、ニヤッと笑う。

(Sk児0歳8か月)

保育者が、「○○ちゃん、おはよう」というと、ニヤニヤ笑う。 (Da児0歳10か月)

保育者が声をかけると「ニヤッ！」と笑う。 (Sk児0歳10か月)

保育者が抱っこして「○○ちゃん、おはよう」と声をかけると、ニヤッと笑い、しがみつく

(Yo児1歳0か月)

保育者が「○○ちゃん、おはよう」と言うと、ニコッと笑う。 (Yu児1歳2か月)

保育者の「○○ちゃん」という呼名や、「おはよう」というあいさつ言葉や、「のぞきこむ」などの動作に対して、乳児たちが「あいさつ表現」といってもよいような応答表現をしはじめる。たんなる微笑ではなくて、保母の働きかけにたいする応答の表情である。それは「ニヤッ」や「ニヤニヤ」などの表情だけではなくて、その働きかけにおうじて「しがみつく」という動作にもあらわれる。

8) 当番の先生にも抱かれる

嫌がらずに抱っこしてもらおう。

(Da児0歳8か月)

当番の先生にも嫌がらずに抱っこしてもらおう。

(Yo児0歳10か月)

この0歳児クラスには6人の子どもがいた、ふたりの保母が担当している。クラスの子どもにとって、保育園での1日を、ほとんどクラス担任と過ごすことになる。だから、0歳児にとって、ほかのクラスの先生に抱かれることにも、かなりの抵抗がある。

だからクラス担任以外の先生に抱かれることは、担任保母に抱かれるのとはちがった新しい段階だと考えられる。

9) 担任に手を出す、身をのりだして抱かれる

当番が担任のときは、手を出すようにしている。

(Da児0歳8か月)

いったん保母に抱かれると、母親のところに戻ろうとしない。

(Yo児0歳8か月)

担任のときは、手を出し、身をのりだしてくる。

(Yo児0歳10か月)

保母が「おはよう、おいで」と声をかけると、抱かれようと手を出してくる。

(Yu児0歳11か月・Ma児0歳11か月)

保母が「おいで」と言うと、ニヤッと笑って抱かれようとする。

(St児0歳10か月)

保母が「よっちゃん、おはよう」と声をかけ、手を広げて迎えると、待ってましたとばかりに、自ら手を出し、身をのりだしてくる。

(Yo児0歳8か月)

保育者が「〇〇ちゃん、おはよう」と手を広げて迎えると、抱きついてくる。

(Sk児1歳0か月・Yu児1歳2か月)

「〇〇ちゃん、おはよう」というと、手を出し、身をのりだしてくる。

(Yo児1歳0か月)

保母が声かけをすると、ニコニコ笑顔でくる。

(Yu児1歳5か月)

「〇〇ちゃん、おはよう」というと、ニヤッと笑い、おもちゃを指さし、とつてくれと訴える

(Ma児1歳7か月)

母親に抱かれている乳幼児を受けとるとき、保育の専門家である保母は「素手で」立ち向かうようなことはしない。なんらかの働きかけをしているのである。

記録にあらわれた働きかけとして、保母は乳幼児を前にして次のような活動をおこなう。

a) 「〇〇ちゃん、おはよう。おいで」などの言葉がけ

たんなる「おはよう」ではない。急に「おはよう」と言うのではなくて、いったん「〇〇ちゃん」と名前を呼んで注目させたあとで、「おはよう」というあいさつ言葉をかけている。保母の言葉がはっきりと発音され、明るいトーンをもっていることはいうまでもない。「〇〇ちゃん」という名前の呼

びかけ、「おはよう」というあいさつ言葉、「おいで」という指示の言葉の3種類がある。実際に子どもに働きかけるばあい、これらの言葉が単独で用いられたり、3つ全部が連続して用いられたりなどのバリエーションがみられる。

b)子どもに向かって「手を広げる」などの、「迎え入れ」の動作ながされる。

c)さらに、保育者である保母が、同時に記録者をも兼ねているので、保育記録の上には表われることはないが、上記の言葉がけや動作とともに、目を見開く、眉を上げる、口を開けるなどの表情が観察される。

以上の言葉や動作や表情などが、乳児たちのさまざまな行動を引き出す。記録にあらわれた活動をまとめると、次のとおりである。

- ・手を出す（0歳8か月）
- ・母親のところに戻ろうとしない。（0歳8か月）
- ・身をのりだしてくる。（0歳10か月）
- ・抱かれようと手を出してくる。（0歳11か月・0歳11か月）
- ・ニヤッと笑って抱かれようとする。（0歳10か月）
- ・自ら手を出し、身をのりだしてくる。（0歳8か月）
- ・抱きついてくる（1歳0か月、1歳2か月）
- ・ニコニコ笑顔でくる。（1歳5か月）
- ・ニヤッと笑い、おもちゃを指さしとってくれと訴える。

これらは、0歳児の「あいさつ表現」の要素でもある。

10) バイバイという手をふる

保育者が「バイバイ」と声をかけると、「バイバイ」と手を振る。

(Yu・Ma 1歳0か月)

保育室の戸を自分であけて廊下に出て、戸を閉めようとして、保母にむかって「バイバイ」をする。

(Ma 1歳2か月)

保育者が「○○ちゃん、バイバイは？」と促すと、母親にバイバイと手を振る。

(Yo 1歳0か月)

母親が「○○ちゃん、バイバイ」というと手を振る。

(Ma 1歳7か月)

保育者「○○ちゃん、バイバイは？」と促すと、母親に、大きく口を開けて、バイバイと手を振る。

(Da 0歳10か月)

朝の「バイバイ動作」は次のような関係のもとになされる。

- ・保母に手を取ってもらって「バイバイ動作」をする、
- ・保母の「バイバイは」の言葉かけに促されて手を振る、
- ・母親に対する保母の「バイバイ」の言葉や動作をみて模倣する、

・母親の「バイバイ」の言葉に応答して手を振る、
結果としては「手を振る」かたちのバイバイであるが、そのきっかけにはいくつかの類型化が可能である。

11) あいさつ言葉「バイバイ・おはよう」などの発声ができはじめる

母親に「バイバイ」といって手を振り、機嫌よくわかる。(Ma 1歳5か月)

保育者が「かあさん行っちゃったね」というと、「あっち行った」「バイバイ」という。

(St 1歳5か月)

「Daくん、きちよってよ、おはようは？」と促すと、「はよー」という。

(Sa 1歳5か月)

「○○ちゃん、おはよう」というと、はっきりしないが「はよー」という。

(Yu 1歳7か月)

朝登園して保母に出会い、母親と別れることの意味もわかりはじめて、「機嫌よくわかる」ことも可能になる。そのとき保母に対しては「はよー」の言葉が、母親に対しては「バイバイ」の言葉が使われはじめる。

12) 保育者の援助で、友達とかかわって「あいさつ表現」ができはじめる

保育者の「○○ちゃん来ちよってよ、好き好きは？」の言葉がけで、友だちの顔に自分の顔をすりよせる。(Yu 1歳5か月)

ふたりの子どもがたがいに手を握りあう。(St児 1歳4か月、Yo児 0歳11か月)

Da児の顔を見て「Daー」または「Daちゃん」と名前を呼ぶ。

(Ma児 1歳7か月、St児 1歳3か月、Sk児 1歳1か月)

これまでの「おはよう表現」は、大きく次の3つの関係においてなされていた。

- ・「保母・子ども」対「母親（保護者）」、
- ・「保母」対「子ども」、
- ・「母親（保護者）」対「子ども」

これからは、いずれの場合も、一方だけに子どもがいる場合であった。この段階からさらに進んで、今度は「子ども」対「子ども」の関係、つまり子ども相互による「おはよう表現」へと高まっていく。

保育園や幼稚園で幼児どうしがお互いに「おはよう」というあいさつを交わすことはあまり見られないが、いずれ子どもどうしが朝のあいさつを交わすことにむすびつく芽ばえであると考えたい。

以上が、0歳児クラスの子どもに見る登園時の「あいさつ表現」の発達のプロセスである。

朝の登園時に子どもたちが泣くことを、多くの母親が良くないことを考えやすい。同じように、保母までもが泣くことを良くないことと受けとりやすい。0歳児の「あいさつ表現」の発達過程を分析してきて、「泣くこと」「しがみつくこと」も、いずれ「あいさつ」へと発展するような活動であることが明らかとなった。家庭においても、保育園・幼稚園においても、0歳児のなにげない動きのなかにも、いずれあいさつの言葉や動作や表現などへと発展する可能態であると見たいものである。

また、あいさつ表現そのものも、たんなる形式的で儀礼的な言葉や動作であると限定的に考えないで、幼児教育における「総合的な出会いの活動」であると考えたい。

7. まとめ：0歳児の「あいさつ表現」ができるまで

以上の0歳児の「あいさつ表現」ができるまでの大よそのプロセスを項目的にまとめると次のようになる。

- 1) 保母との出会いや母親との別れの意味が分からない (0歳3～5か月ごろ)
- 2) 泣く (0歳5か月ごろ)
- 3) 保護者にしがみつく (1歳0～3か月)
- 4) 泣きやむ (0歳10か月～1歳3か月)
- 5) 母親を追視し、あとを追おうとする (0歳10月～1歳2か月)
- 6) 泣かずに保母に抱かれる (1歳0か月)
- 7) 保母の「おはよう」の声かけに対して笑う (0歳5か月～1歳2か月)
- 8) 当番の先生にも抱かれる (0歳8～10か月)
- 9) 担任に手を出し、身をのりだして抱かれる (0歳8～10か月)
- 10) 「バイバイ」と声をかけると手をふる (0歳10か月～1歳7か月)
- 11) あいさつ言葉「バイバイ・おはよう」などの発声ができはじめる
(1歳5か月～1歳7か月)
- 12) 保母の援助で、友達とかかわって「あいさつ表現」ができはじめる
(0歳11か月～1歳5か月)

本研究をスタートさせる時点において0歳児の登園場面でのあいさつ活動(おはよう活動)は、一見すると「バイバイ」と「はよー(おはよう)」だけのように思われたが、それらの「あいさつ表現」にいたるまでに、じつにさまざまな表現活動をおこなっていることが分かってきた。同時に、そのことにより、保育者自身の子どもの活動への見方やかかわり方に変化をもたらした。

8. 謝 辞

本論文を書くにあたっては、1990年6月1日を期して実質的にスタートした山口市立大内保育園の先生方との共同研究をもとにした。大所高所からの指針や具体的な保育実践にいたるまでご教示いただいた徳田恵子園長先生、実務を担当された主任の岡禮子先生に心より感謝申し上げる。

また、以前から構想していた「あいさつ」というテーマの保育的意味を理解してくださって、私の研究を具体化するきっかけをつくっていただいた。実践人と研究者との関係は、このようにおたがいの仕事を刺激しあうことだと思う。その意味では、実践的研究の典型であると思う。

このたびの論文の中心となった0歳児クラスの主任・林和子先生そして布谷仁美先生にも、こころよく資料の提供をいただいたばかりか、事実には誤りがないようにと実践人の立場から目を通していただいた。

(注)

- 1) 鶴見俊輔・粉川哲夫編『コミュニケーション事典』平凡社、1988、39ページ。
- 2) 1990年6月1日付の0歳児ひなぎく組の布谷仁美先生の記録から引用した。
- 3) 岡本夏木著『子どものことば』1982年、岩波書店、26ページ。
- 4) 村田孝次著『子どものことばと教育』金子書房、昭和58年、196・197ページ。
- 5) 0歳児の「おはよう表現」の分析にあたっては、主要には次の記録がもとにした。
 - ・「あいさつ」大内保育園、ひなぎく組資料(1990年6月1日)
 - ・「おはよう表現」の実態(1990年7月20日)
 - ・「ひなぎく組の1日」(1990年9月27日)
 - ・「ひなぎく組指導案」(1990年10月16日)
 - ・「おはよう表現の実態」(1990年12月3日)
- 6) 小此木啓吾著『笑い・人みしり・秘密—心的現象の精神分析』創元社、昭和55年、98・99ページ。
- 7) 高橋恵子著『自立への旅だち』岩波書店、1984、106ページ。